

牛をみんなが飼うことよってその村全体が良くなっていく。「朝鮮で聖人と呼ばれた日本人」という本が出ております。この方は官僚ですから戦後は逮捕されるんですね。追われる立場になりました。そして捕まるんですね。取り調べに当たった検事が「重松先生、私のことを覚えていませんか。先生の卵の貯金で学校に行った金東順ですよ。」と言うんです。重松さんに助けられ、鶏のお蔭で学校に行けた。そのお蔭で今、検事になっているということ、先生、任せてください。先生は必ず私が守りますから」といろいろ取り計らって、重松さんは無事日本にたどり着くことができたんです。日本人に世話になったという方はいっぱいいるんです。国家として反対しているためにそういうことは言えない、感謝もできない、お礼も言えない。話を戻しますけども、問題が起きたときに問題のせいにして、あるいは問題が起きたからこうなつたというのではなく、逆にその問題の対処、対応の仕方が果たして正しいかどうかを考えていただきたいです。

私は昭和三十六年に事業を始めまして、ずいぶんいろんな災難に遭いました。人にだまされたり、会社が消滅しそうなくらい大きな損害を被ったこともありまして、それから私自身の判断で大きな取引先を次々とやめて売り上げが激減しました。分かってた上でそういうことをしました。それはなぜか。この仕事は将来、二十年も三十年も先までやる仕事

# 便教会新聞

第122号  
H.28 6月

## 悟

じやない。そういう相手ではないと見定めたわけです。昭和五十一年、売り上げの60%、売り上げの半分以上をやめるということは命がけです。10%だってやめることはなかなかできないですよ。私は覚悟して、やめると決断したんです。その時の決断が正しかったから会社が今残ったんです。決断するときから大事な条件が一つあるんです。この仕事をやれば絶対に社員が幸せになれない。会社も良くなる。だとしたら先に行つてやめるんじやなしに、今すぐにやめるべきだと決断をして、大変な危険を覚悟してやめました。売り上げが落ちて大変な目に遭いました。でも人間というものは不思議ですね。そういうもの凄く厳しい環境の中に身を置くと、今まで気がつかなかったことに気がつくようになります。凄く力を発揮するようになるんですね。そこで次々と大ヒット商品を生み出すんです。あれがなかったら、会社はもたなかったと思います。会社は一時低迷しましたけども、そのあと急に成長をしてきたわけです。人間が飛躍するには、どういうときに飛躍して成長するのか。それは覚悟をして決断したときなんです。その覚悟も決断もできない人は絶対に飛躍なんかできない、成長もできない。いつまでたつても変わらない。人生の中でいろんなことが起きたときには、今のこの事が十年後、二十年後どうなるか。今より良くないと思つたとき、潔くそれをやめるくらいの覚悟をしていただきたいですね。

便教会は、教師の教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高めることを目的としています。

便教会新聞発行責任者 高野修滋  
〒四四五〇八〇二  
愛知県西尾市米津町天竺桂二七  
TEL 〇五六三一五六―四三二七

## 『トイレ掃除から学んだこと』

(東京都) 豊島区立千早小学校  
教諭 中村 路佳

トイレ掃除との出会いは、今から五、六年程前、私が教員になる前のことです。ある教師塾の講演会で鍵山相談役が来てくださり、その後、トイレ掃除実習を行いました。会場となった小学校は駅から離れ、とても不便な所にあった為、人数も10人に満たなかったと思います。それでも、相談役が来てくださったことを今でも覚えています。

当時の私は、トイレ掃除もしたことがありませんでしたし、鍵山相談役がどのような方なのか、存し上げていませんでした。けれども、「心を磨く」という言葉が、私の胸の奥にずっとありました。そして、その言葉は、時に自分を励まし慰め、時に自分を苦しめていました。なぜなら、実践と日常生活がまったく別ものだったからです。一見、頑張っているように見えるけれど、本当の自分は、嫌なことから逃げてしまわずにいる人間。トイレを見る度に自分自身と重ね合わせていました。他の人と一緒にいる時はできるのに、いざ一人になると出来ない。出来

ない理由を頭で考えては、言い訳ばかりしてました。

心の葛藤が何年か続いていた時、毎月購読している雑誌で、相談役が全国の学校のトイレ掃除を通して、「優れた人格を備えた先生に出逢う一方、残念ながら教壇に立つ資格がないと思われる先生も少なからずいることも事実」と仰っていました。

「組織はそこにどういるかで決まる」「果たして自分は、学校という組織の中で、どのような人間なのか・・・」

考え悩んでいた時、学校の居残りで、ある男子生徒がトイレ掃除をしているところを見かけました。その生徒は、私に対して暴言を吐いたこともあり、頻繁に生徒指導されるような生徒でしたが、根は素直で優しい子です。トイレ内は、掃除が行き届いていない所もあり、床も汚れている状態でした。私は、彼の日頃の様子から、すぐに止めてしまうだろうと思いましたが、一緒に掃除をすることにしました。

始めは、匂いがひどく苦戦しながらも、便器の裏側を見ると水垢があり、これが匂いの原因だと教えると、しゃがんで水垢を取り始め、最後には足をつけて床を拭くまでになっていました。掃除中、色々な話をしてい

## 【編集後記】

若い先生たちが身を低くしてトイレ掃除をする姿は貴いです。5月28日第10回奈良便教会、翌29日第3回東京便教会、いずれの便教会も若い先生が中心となって掃除の素晴らしさ、魅力を発信されています。私は四十歳を過ぎ、追い込まれ八方ふさがりになり嫌々のトイレ掃除が始まりましたが、出会いは一瞬早く、遅からずでジャストインタイムでした。必要なものが、必要な時に、必要な量だけ入ってきます。あれから19年間、トイレ美化活動は私の成長の糧であり続けています。ここ数年で便教会の活動が全国に広がっています。若い先生が掃除道の魅力に惹かれることでより多く掃除の種まきができます。「掃除に学ぶ会と便教会は何が違うの？」と質問されることがありますが、やることは同じで「きれいを広げること」です。世の中からの心の荒みをなくすことが鍵山相談役の心願であり、掃除道にご縁のある人々の目指すところでもあります。それじゃ何故、便教会なのか。人間教育に影響を持つているのは教師です。幼稚園、小学校、中学校、高校と子どもたちは先生の一挙手一投足を見ています。どんなに立派なことを言っても子どもたちの目は澄んでいて、本当のこと、嘘のことは見極めていきます。教師の教師による教師のためのトイレ掃除に学ぶ会「便教会」は、ひよつとしたら傲慢、高慢になりかけた自分への戒め、気づきを与えてくれるかも知れません。気づくこと、やり直すことに早すぎることも遅すぎることもありません。 高野修滋 拝

分はいい子なのか悪い子なのか」と突然、聞いてきました。その時私は、はっとしました。最初、この子はすぐにトイレ掃除を止めてしまおうと疑いの目で見ていたことを・・・き

つと、私の心を察したのでしょうか。彼だけではありません。圧倒的に成功経験が少なく、褒められることがない子どもは、自分のことを「悪い、できない」と責めてしまっている。その状況をつくってしまったのは、教師自身です。

教師は、口では正しいことを言いますが、言葉と日々の行動が伴っていない時に子どもはそれを見抜き、大人を疑いの目で見るようになります。それが、心が荒む原因になっていくのだとこの時思いました。そして、自分の先入観で生徒を判断している教師が学校の組織にいたら、それが「一見、綺麗に見えるけど見えない汚れ」であり、トイレの匂いのように、目に見えないけど周りを苦しめる元になっているのだと思います。

便教会で出会った先生方が仰っているように、目線を低くして学ばなければならぬのは教師だということを真摯に受け止めたと思います。なぜなら、学校教育は人間形成に大きな影響を与え、その限られた時間の中で、教師が教えられることはほんの僅かなことだからです。

二年前、15歳という若さでこの世を去った生徒がいます。彼は「一番大切なもの」という課題の中で、病気で震える手で「一生懸命、「命」と書きました。そして、「みんなと勉強がもつとしたかった」と言いました。

命の灯が消えそうになっても、それでも学び続けたいと願った彼から、「人はどんなに困難な状況であっても決して学ぶことを止めてはいけない」ということを教えてもらいました。

私は昨年、中学校教員から小学校教員になりました。子どもたちの命の輝きが自分の心を明るく照らしてくれます。自分ばかりが何かしなればと縛られていたことも、子どもたちからもらう温かさもあるのだと最近思うようになりました。生きていく喜びを感じつつ、今ここに自分があること、トイレ掃除を通して出逢った方々に感謝の気持ちをもって、これからの日々の生活を丁寧に生きていきたいと思えます。

## 『一步』

(愛知県) 犬山市立城東小学校

教諭 山田 早織

私がトイレ掃除のことを知ったのは、一昨年。同じ学年で一緒に過ごしていた小山先生が、この年の12月に私の勤務校で便教会を立ち上げたことがきっかけでした。トイレ掃除というと、人がやりたがらない、やらなければと思うから行けけれども、手を出しづら

初めて終えたトイレ掃除で、私の心に一番残ったことは、その場の空気が変わったことでした。言葉ではうまく表現できないけれど、澄んでいて、気持ちがよくて、汚れがとれた綺麗さだけではなく、トイレ全体が明るく感じました。きっと自分が体験したからこそ感じられた、その場の空気。トイレ掃除をするまでの葛藤は、汚れと一緒にずっと消えて、「ああ、やってよかった。」という気持ちだけが、その場に残りました。

その後、五回のトイレ掃除に参加させていただきました。毎回、トイレ掃除をさせていただくたびに、新たな気付きがあります。綺麗にするための様々な工夫。見える汚れだけでなく、見えない汚れに体のあらゆる感覚を使って向き合うこと。正直、私は何かを考えながらトイレ掃除をすることはできていません。その時、一瞬一瞬で出会った汚れとただただ向き合うだけ。それでも、今回、一步踏み出したことは、私がこれまで知らなかったものをたくさん見せてくれました。これから、自分が変わる何かのきっかけに、そして、トイレ掃除を通して、自分を見つめ直すことができましたら、と思います。

らいというイメージがありました。当時、私は、城東小学校でトイレ掃除を行うことを聞き、自ら学校全体のトイレ掃除を行うと話された小山先生に感心させられたものの、自分が参加することを考えてすらいませんでした。その年、私が担任していたクラスは一年生。教室の隣に男子トイレがあり、休み時間になると、150人ほどの児童が代わる代わるのトイレを利用していました。毎日の掃除の時間に、トイレ掃除ももちろんあります。しかし、黄色く色が変わった床、薄汚れた色の壁、ツンとした臭いなど、トイレの状況は決してよいものではありませんでした。それは、休日に誰もいない教室へ行くと、教室中に何ともいえない臭いがたちこめているほど。小山先生がそのトイレを一人で掃除していたこともありました。けれども、何もしない自分。小山先生がトイレ掃除を始めたことを知りながら、見て見ないふりをしていました。それから、半年程たったある時、小山先生から声をかけていただきました。「一緒にトイレ掃除をしませんか」と。その時、私は、城東小学校のトイレの汚さ、小山先生が一人でも一生懸命トイレ掃除を試みたことが一番に思い出されました。一方で、私の勤務校で参加している職員が小山先生以外誰もいないことが気にかかりました。なんとなく、皆に広がらない雰囲気。自分が気になるのなら、一步踏み出せばいい。それだけのことが、重くて、なかなか「はい」と返事ができません

## 『覚悟と決断』

日本を美しくする会  
相談役 鍵山 秀三郎

今、日本の国にはたくさん問題があります。国家にも、社会にも、学校にも、家庭にもたくさん問題があるんです。そうするとみんな、「こういうことがあったからこういうやつたね」と問題のせいにする人が多いです。人生まで問題のせいにする人が多いんです。しかし、「こうだったのにこうなれた」という人生の人もいますよ。同じような問題が起きたとき、片方は「私はこうだったから、こうなっちゃったんです。」と人生を終わる人もいるし、「私はこうだったのにこうなれました。」と言える人もいます。もう一步進めると、「最初の問題があったからこそ私はこうなれました。」という人もいます。そういうふうになりたいですね。私がどういうことを言いたいのかと申しますと、「問題が起きることは問題ではないんです。問題に対してどう対処していくのか。どう対抗していくかが問題なんです。」その対処の仕方、対応の仕方が悪いと何もかもが悪くなってしまう。そうすると、私はこういうことがあったからこうなってしまうと問題のせいにする。ところがその問題をとらえて、私はこういう問題があったのにこうなれました。もっと進んでいる人は、私はこうだったからこ

でした。結局、周りの目を気にしていた自分に気付きつつ、また足踏みをしました。そんな私が参加した初めてのトイレ掃除。昨年の11月のことでした。学年が離れてからもトイレ掃除に一生懸命取り組まれる小山先生の姿、そして、同じ職場の先生が便教会に参加されたことが、私の背中を押してくれました。初めて掃除した場所は、一年生の時に気にかかっていた男子トイレでした。その日は、小便秘器を担当させていただき、初めて小便秘器の奥を見て、硬い汚れの塊に驚きました。何年も積み重ねられた汚れは今まで想像したことがないものでした。また、便秘器の奥を見た時に感じた鼻を突く臭いは、教室で感じたものとは比べ物にならないくらいでした。自分の手で磨くことに少し抵抗を感じましたが、その迷いは最初だけでした。夢中でした。この汚れを落としたい。自分の手で汚れが落ち、目に見えて変わっていくことが、ただただ楽しくて、時間を忘れて取り組みました。

この日の経験は、いろいろな気付きを私にくれました。壁の下の方についた黒い汚れ：子どもたちがけたのかな。子どもたちの手が届く高さはいろいろな場所が黒くなっている：手はきちんと洗っているのかな。床にこびりついた黄色い汚れ：どんなトイレの使い方をしているのだろう…。子どもの姿が、トイレのいろいんな場所から思い浮かび、考えさせられました。

そして、何より大きかったのは、周りの便

そ、こうなれましたという人ですね。これを私の人生に当てはめてみますと、戦争で家が焼かれて、全く経験のない農業生活をやった大変な生活をしました。でも家が燃えても住むところがあつたからこそ、私は今のよう勤勉で誠実な人間になることができたんです。もしか私が恵まれた裕福な家庭のままです。育っていたら、およそ誠実とか勤勉とかとはほど遠い人生になっていたと思いますね。ということ起きた問題はそんなに問題ではないんです。問題に対してどう対応して、対処していくか。問題のせいにする人は問題のせいになればするほど不安になってくる、心配になってくるんです。そうすると益々人のせいにする、社会のせいにする、誰かのせいにする。お隣の国の朴大統領を見ればおわかりでしょう。何が起きても日本のせいにする。あれは不安になっていくから、ものすごく不安を持っているから日本のせいにはせざるを得なくなってくる。日本のせいにする益々不安がかさむからもっとやるといふ悪循環に陥っていると思うんです。私は本当に気の毒だと思います。一人ひとりはい人がいっぱいいるんですけども、そういう国家に入るとその流れに流されてしまう気の毒な国民だと思っております。重松隼修(しげまつまさなお)、この方は戦前、韓国の貧しい人たちの面倒を見るために鶏のひよこを与えるんですね。その鶏を育てて産んだ卵を絶対に食わずに、売った卵のお金を貯めて牛を飼う、その